

特集：新センターにおける先端基礎研究 新旧センター長挨拶

新しい先端基礎研究センターの スタートに当たって



先端基礎研究センター長

■ 旗 野 嘉 彦 ■

新機構は「原子力」に関する4つの大きな研究開発目標を目指して発足し、これらの共通的科学技術基盤としての新しい先端基礎研究が求められている。衣替えした新しい本センターは、発足後3、4ヶ月の経緯を踏まえて、以下のような「先端基礎研究に関する4つの基本的な考え」を設定して「原子力」に関する活発な研究を実施している。

本センターで実施される研究は、(1)まず当然のことながら、国際的レベルで鋭いピークを持った先端基礎研究であること、具体的には評価機構の基準に照らして相対的でなく絶対的な評価に基づいたものであること、(2)次に、これは普通名詞でいう一般的な先端基礎研究でなく、機構の高度な物的・人的資源の特徴が生かされたもので、国内外の大学・諸研究機関で実施が著しく困難であるものであること、(3)本センターは黎明期の独創的・挑戦的な研究のインキュベーターであると位置付け、将来へ向けて一人歩きできるまで研究を活性化・成長させることを目標にすること、(4)また、本センターでの研究は新しい第3期科学技術基本計画に照らして、特に、基礎研究重視の立場から応用・社会との接点へ向けて独自の視点を持つようにすること、当該分野・関連分野の人材養成に留意すること、を「基本的な考え」としている。

新機構発足へ向けて検討され設定された、超重元素核科学、アクチノイド物質科学、極限物質制御科学、物質生命科学の4分野にわたる8テーマについて、総数105名（職員51名、客員研究員17名、博士研究員17名、特別研究員7名、リサーチフェロー3名、その他10名）の構成メンバーが目標を目指している。これら8テーマの研究は、常に上記の4つの「基本的な考え」に照らしながら強い競争的な場のもとで自己点検評価され、その結果を踏まえて、研究テーマの改廃、ダイナミックな改定、新テーマ導入の可能性について内外と意見・情報交換が行われつつあるところである。2月中旬には、機構の評価室に基づいた外部点検評価がスタートする。

上記の「基本的な考え」を満たしながら活発な「先端基礎研究」を実施するために早急に望まれることは、正規職員数に対して少なくとも2、3倍の活発な任期付きの若手研究者、院生等の参画が望まれる（現状は、職員と非職員はほぼ同数）。より一層の国際化（特に若手外国人研究者の参画）、研究者の流動性、機構内他部門・機構外との連携・協力・交流にも留意している。

この機会に、研究の現場で活躍されている若手の方々に、「先端基礎研究」に関連して、自分自身の反省も踏まえ日ごろ心がけていることを紹介させていただくことにする。科学・技術の発展に基礎研究が重要であることは言うまでもないことである。しかし、基礎研究を行う者はその立場から応用・社会との接点へ向けた独自の視点を持つべきであると考えている。基礎研究の独創性が富んでいれば必ずから応用研究とのインターフェイスが構築され、さらに産業界、社会への波及効果も大きくなるでしょう。研究の独創性は研究手段・手法の創案によることが大きいことは確かでしょう。また、研究上は常識に反すること人とは違うことを目指し、日常生活では社会性に留意することが大切と考えている。